

- 1 Nemzetközi Konferencia
- 1 Internazionale Konferenz
- 1 International Conference

1991. március 14-17. Budapest.
 14. bis 17. März 1991. Budapest, Ungarn.
 March 14-17. 1991 in Budapest, Hungary

Előadások — Hangversenyek — Mesterkurzusok — Bemutatók —
 — Kerekasztalbeszélgetés

Referate — Lecture Recitals — Masterclass — Konzerte —
 — Round-Table-Discussion

YAMAHA KIÁLLÍTÁS YAMAHA EXPOSITION

ハンガリーでの演奏会

ピティナ・ヤングピアニスト達 大好評を博す

～EPTA 国際大会 ハンガリーで開かる～

カローラ グランディア女史 (Madam Carola Grindea) のよびかけによって生れたヨーロッパ ピアノ指導者協会 (略称 EPTA) も、10年の歳月がすぎ、東欧圏では初めてハンガリー・ブダペストに於いて国際大会 (International Conference) が '91 3月14日から17日に亘って開かれた。

昨1990年夏、ピティナのコンペティションにおいて、G・特級の御審査をされた武蔵野音楽大学客員教授のトゥーシャ先生 (Prof. Tusa Ersébt) が、ハンガリー・EPTAの会長をしておられることから、昨年G級金賞受賞された原まりこさんと、特級金賞なし銀賞の近藤麻里さん、E級銅賞受賞の今出黎子さんが、ハンガリーに招かれて、グラーツ、ブダペストのヤングピアニストにまじってコンサートに出演、大好評を博したのだった。演奏旅行を兼ねたこのたびのロンドン～ブダペスト～ウィーン～ロンドンの旅行記をお届けしたいと思う。(福田靖子 記)

PTNAピティナ・ヤングピアニスト達が、EPTAの大会に招かれ演奏を披露したのは、これで2度目のことである。1984年10月に開催されたドイツ・ケンプテン (Kempten) でのEPTA大会において、その年の入賞者、永原 緑さん (当時小3, C級金賞) と三角由里さん (当時中1, D級金賞) の2人が招かれ、コンサートに出演したのだった。

話が横道に逸れるが、この時の旅行ではザルツブルグにも行き、モーツアルテウムでもピアノを演奏した永原緑ちゃんは、ペーター・ラング先生 (Prof. Peter Lang) に抱き上げられ、ほっぺにキスされたことが昨日のことのように思い出される。その緑ちゃんも今年から、東京芸術高校1年生である。そして、ペーター・ラング先生はモーツアルト没後200年記念のコンサートで、日本国内を廻っておられるのだ……。

話を本道にもどそう。今年のEPTA大会出演も、ハンガリーは初めてということもあって非常に印象深いものとなった。そして、1984年の時は、小3と中1の2人が渡欧したのだが、此度は大学生2人と中2の計3人が渡欧したように、PTNAの成長をも感じたのだった。

初め10余名のツアーのはずだったのが、湾岸戦争勃発の為に8名の家族的な旅行となったが、私たちが出発する3月12日には停戦となっていたのだから、本当に幸な

ことであつた。



上写真: さあ、ロンドン・ヒースロー空港に到着。左から近藤麻里、原まりこ、石本律子、今出黎子その前、林雅清、千葉禮子、今出美知子、一番右は添乗の寺田勝也の皆さん。



右写真: 日本出発。最初の夜はロンドンで。さあこれからブダペストに向います。第一夜を過ぎたホテルの前に立つ筆者。上と下の写真でツアー全員。



上写真：3月14日は、ブダペスト春の音楽祭の始りの日でもあった。トゥーシャ先生のおはからいで、国際チャイコフスキーコンクール第一位のベレソフスキーのピアノ協奏曲を聴くことができた。



左は春の音楽祭プログラム表紙

3月13日ブダペスト空港に到着すると、EPTAの方と、日本語通訳のレッシーさん (Reczey Tibor) が、迎えに来て下さっていた。ハンガリーは、日本と同じく姓名の順で呼ぶ。下の写真の右側の老紳士がレッシーさんで、私たちブダペスト滞在中、何かと私たちのめんどうを見て下さった。

ホテルに到着すると、右側のEPTA………会議に参加して来た と書いたワープロ文字の表を下さったのも感動であった。



左写真：大会のメイン会場であった芸術家クラブの建物。滞在ホテル ロイヤルからもまたリストアカデミーからも約2分の所にある。クラブの中のレストランは、コンサートが終ってから食事ができるよう夜中の1時迄開いていた。



右日程表：寺田勝也氏が、ハンガリーに到着してから頂いたプログラムを多忙の中、訳して下さった。

EPTA HUNGARYの会議に参加して来た 日本の代表団の日程 1991年3月13日—19日

3 / 14(木)

- 9 : 00 ホテルロビー集合 会場芸術家クラブへ
- 10 : 00 オープニング挨拶 E. TUSA
- 10 : 30 ゾルタン・ラツオ公開講座
Zoltan LACZO (ハンガリー)
ピアノ教育に依る成功例
教育理論と指導の役割
- 11 : 15 ジャック・シャビエール公開講座
Jacques CHAPUIS (フランス)
E・WILLEMの教育理論概念の紹介
- 12 : 45~14 : 30 昼 食
- 14 : 30 ヤマハ音楽財団による展示場オープン
於 リストアカデミー
- 15 : 30 レフ・バレンシニコ公開レッスン
{ Lev VLASSENK (ソヴィエト)
- 18 : 30 於 リストアカデミー チェンバーホール
- 19 : 30 ブダペスト春の音楽祭オープニングコンサート
{ 於 ブダペスト コンgressホール
- 21 : 30 チャイコフスキー／ピアノ協奏曲 他
ピアノ：ボリス・ベレソフスキー (ソヴィエト)
Boris BERESOVSKY
(1990年チャイコフスキー国際コンクール1位)

3 / 15(金)

- 於：芸術家クラブ
- 9 : 15 マーリン・アブラハム公開講座
Mariann ABRAHAM (ハンガリー)
1920~1926年代のMargit Varróの心理的特徴、
Varróとマイクロコスモス
- 10 : 30 アンドレ・ハイドウ レクチャーリサイタル
Andre HAJDU (イスラエル)
氏の四部作“ミルクィー・ウェイ”の紹介
- 12 : 30~14 : 00 昼 食

(次頁へ続く)

3 / 15(金) (前頁からの続き)

- 14:00 トーマス・ハモリ公開講座
Thomas HAMORI (スイス)
音楽的表現は教えるべきなのだろうか?
- 15:15 ロイス・ケルツ公開講座
Lajos KERTESZ (ハンガリー)
子供のための「ランツ・リストとツェルニー」
子供たちによりピアノ演奏
- 16:45 ユリカ・マライ公開講座
Jurica MARAI (ユーゴスラビア)
クロアチア音楽について
- 19:30 ワールド プレミアコンサート
於 リストアカデミー チェンバーホール
ゾルト・ドルコ ピアノ演奏
Zsolt DURKO'S (ハンガリー)
- 21:00 “天体の物語” 1990年作曲
21:00 レセプション
リストアカデミー院長による歓迎会
於 芸術家クラブ

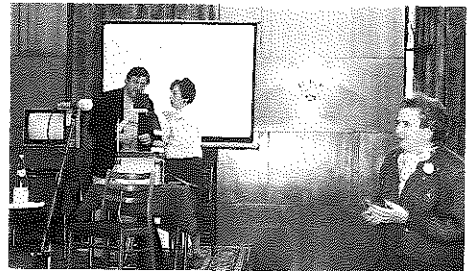
3 / 16(土) 於 芸術家クラブ

- 9:30 エディット・ピヒト=アクセンフェルト
Edith PICTH=AXENFELD (ドイツ)
20世紀ウィーン楽派アルバン・ベルクの
ソナタ分析
- 10:45 ハインツ・ワルター (ザルツブルク国立音大教授) と
エリカ・ベヒト (ハンガリー) の教育理論と実践
Heinz WALTERとErica BECHT
リストアカデミー研究所附属音楽教室の子どもたち
によるピアノ演奏のサンプリング
- 12:00~13:30 昼 食
- 13:30 カローラ・グランディア
Carola GRINDEA (イギリス)
芸術的表現と体の自由な動作について
- 14:30 シェンドール・ファルバイ公開レッスン
Sandor FALVAI (ハンガリー)
- 17:00 ギョルギィ・クルターク (ハンガリー)
Gyorgy KURTAGの作品と現代音楽教育についての
協議
デモンストレーター (ピアノ演奏)
Andrea BAGI, Andras CSOBA
Panni NAGY, Anita TERJEKI

EPTA ハンガリー大会は、前頁5頁にあるスケジュール表のように、トゥーシャ会長の挨拶に始まった。そして、先生はオープニングに音楽を奏でましようとおっしゃって、EPTAの男性会員とご一緒に連弾をされたのだった。



トゥーシャ先生はハンガリー語は当然のことながら、ドイツ語、英語を完璧に話される。国際大会であるから、専門の通訳者がいるのだが、時として助け舟を出されるのだった。



上写真：EPTAフランス会長のJ・シャビー氏の講座の始まりを告げるトゥーシャ先生。シャビー氏の隣の女性は、通訳者。

スケジュール表を御覧いただくとこの大会の企画が、如何に充実した内容をもったものであるかよくおわかり頂けると思う。

ピティナ・ヤングピアニスト達は3月16日交流コンサート出演に向けて練習に忙しい。私は、なるべく多くの講座に参加したいと心がけたのだが、語学力の無さには本当に悲しい思いがした。

だが、EPTAには、多くの友人がおり、その方々の講座にはすべて出席したのだった。全体を通して言えることは、公開レッスンや、

子供が演奏する(デモンストレーション)講座には、実に多くのピアノ指導者が集る。未来に向っての講座や現代曲の演奏会、レクチャーには人が集りにくいということである。

この現象は日本でも同じで、教育者こそ、未来に生きる研修をせねばならないのに、誠に残念に思えた。それにしても、ハンガリーの子供たち、のべにすると40人位の演奏を聞いたことになるのだがどれ一つとっても豊かな音楽性を感じさせるすばらしい演奏であった。

左写真：3月15日21時からのレセプションで乾杯。大変美味しかった御馳走はヤマハからのプレゼントとか。夕食をすませて出席した私はあまり頂けず残念なことをした。



一流コンサートは、オーストリアのヤングピアニストたちから始まった。これはすごい、と驚きの念が起る。PTNAのヤングピアニストたちも立派に弾いてくれるだろうか？ 私は胸がドキドキしてきた。が、3人のピティナ・ヤングピアニストたちも美事に演奏してくれた。本人たちの才能・

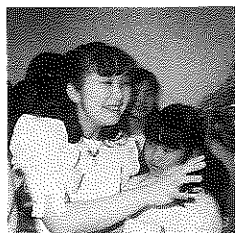
努力もさることながら、ご指導下さった播本三恵子・堀江孝子両先生や杉本安子先生に感謝の気持ち一杯になった。本当に有難うございましたと心から感謝申し上げたい。

右写真：リストアカデミーのチェンバーホールで演奏する今出黎子さん



はじめての海外旅行

原まりこ



左写真：3/7東京でのジョイントコンサートの折

海外に行く……というのは今回が生まれて初めての事でした。以前から行きたいとは思っていたのですが、こんなに早く実現出来た事をとっても幸福に思っています。

とにかく飛行機にも乗った事がない位でしたから不安もたくさんありました。でも行ってしまうと、そんな不安は何処かへ去ってしまう位の驚き、喜びが私の中に飛び込んで来たのです。こんなにも日本と違うなんて思わなかったし、TVで外国の風景、様子は観ていても、リアルではないし、とにかく今、自分が外国人（向こうの人から見れば私が外人なのですが…）に混ざってその土地で生活しているなんて3日位信じられませんでした。でもその何とも言えない感じが好きになってしまったのです。

今回は演奏会もあったので、それが終わるまでは、思いきり遊んだりする気分にはなれませんでした。ピアノの練習をする為にEPTAの方がバルトクアカデミーのレッスン室を提供して下さいました。リストアカデミーのホールを使わせて頂いたので、もう身に余る思いでいっぱいでした。部屋1つをとっても日本と全く違うので、新鮮な気持ちになりましたしやはり、音楽発祥の地で触れる音というのは、何だか違うような気がしました。

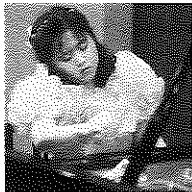
それと、いかに自分が小さいものであるかを実感させられ、もう1度ふり返ってやってみようという思いにとられました。考えかたも変わった様に思うのです。本当に素晴らしい経験になりました。

近いうちにもう1度、外の空気に触れたいです。今まで特に外国で勉強したいと思った事のない私がかんこなになってしまったのですから不思議ですが、本当にヨーロッパ（ハンガリーは特に）のとりこになっています。ピアノを今まで続けていて本当によかった、今の自分は大変幸福なのだと思います。

福田先生をはじめ、多くの方々にお世話になり本当に有難うございました。この場を借りてお礼をさせていただきます。

3 / 16(土) 19:30~22:30 於 リストアカデミー・チェンバーホール グラーツ——東京——ブダペスト 交流コンサート

- Ingrid MARSONER (オーストリア1970年生)
フランク・マーティン作曲
前奏曲 No.7 Lento, No.8 Vivace
- Denise BENDA (オーストリア, 1972年生)
ビラ＝ロボス作曲 Alma Brasileira
Dansa do indio branco
- I. MARSONERとD. BENDA デュオ
ルトスワスキー作曲 2台ピアノの為のバガニニニ
変奏曲
- 原 まりこ (日本 1970年生)
ベートーベン作曲 ファンタジー Op. 77
プロコフィエフ作曲 ソナタ Op. 28
- 今出黎子 (日本 1976年生)
ショパン作曲 ポロネーズ gis moll 遺作
諸井 誠作曲 ソナチネ No. 12
- 近藤麻里 (日本 1971年生)
ドビッシェ作曲 前奏曲
第1巻 No. 10 沈める寺 No. 11 バックの踊り
第2巻 No. 12 花火
第1巻 No. 6 雪の上の足跡
No. 7 西風の見たもの
- Balin ZSOLDS (ハンガリー 1977年生)
モーツァルト作曲 ファンタジー K. V. 475
- Peter JÓZSA (ハンガリー 1977年生)
バルトク作曲 組曲 Op. 14
- Bela SIMON (ハンガリー 1967年生)
モーツァルト作曲 ソナタ D dur K. V. 284
- Dénes VARJON (ハンガリー 1968年生)
ブラームス作曲 間奏曲 Adur
バラード g moll ロマンズ F dur
シューベルト作曲 アンプロムチュ Op. 142 f moll
- Oszkar MORZSA (ハンガリー 生年不明)
リスト作曲 メフィストワルツ



ハンガリーでの私の6日間

近藤麻里



今回の旅は10日間というほんとうに短いものでした。ロンドン経由で、ハンガリーに入り、帰りはウィーンに寄って、またロンドン経由で帰国を…とまあ、超ウルトラ・ハードなスケジュールだったわけです。その中



上写真：東京でのジョイントリサイタルの折

で、ハンガリーには、6日間もいたこともあり、一番印象に残っています。

まず、空港の中に立って、まわりを見回してみても、『え？これが空港？』と、一瞬目を疑ってしまいました。日本の空港と比べると、鉄筋の骨組みだけで、装飾などは一切ないのです。そしてなんだか、ちょっと暗いようなイメージを持ちました。でも、そこには、EPTAからの親切な人達が出迎えに来て下さっていて『こんにちは、よくいらっしゃいました』とすごく上手な日本語でしゃべりかけて下さったのです。マジヤール語なんて分からないし、どうすれば…と思っていた私はこの言葉を聞いて、ホッとしました。そして、その方達の案内でホテルへ向かう車に乗ったのです。窓から見える景色は、やはり今までは、見たこともない独特なものでした。社会主義国とはこういうもの？と、じーっと目を離さずにはいられません。これが、ハンガリーに着いた時の私の率直な感想でした。そして初めの1日、2日は異国の空気になかなか入り込めず、慣れるのが大変でした。でも、演奏会のための練習に行くためにバルトーク音楽院や、リスト音楽院へ通うよう

になると、いつしか“市民”になったような気分が過ぎました。リスト音楽院は、とても立派な石の彫刻の建物で、(早速写真を撮って)

『スゴイ！』という感じなのですが、中に入ってみてもまたさらに、『スゴイ〜！』とWパンチを受けました。校舎全体が美術館のようで、『こんな所で音楽を学べるなんてー!!』と私は感心しっぱなしで、階段の手すりに触って見たり、天井を見上げて見たり、ホールの入口の絵に見入ってしまったら…と練習するホールにたどり着くまで、『もう大変！』でした。さて、そのホールがまた見事なもので、小さいホールではあるのですが、淡いグリーンとブルーで壁や柱に彫刻が施されていて、私はもう、うっとりしてしまっ、『こんな素敵なホールで弾かせて頂けるなんて幸せだな。』とただ感激の気持ちで一杯でした。

当日は、さほどの緊張もなく弾ききれて、観客のみなさんからも、温かい拍手をたくさん頂けて、とても嬉しく思いました。次の日は、本番も終わったことだし…と観光に出掛

3 / 17(日) 於 芸術家クラブ

- 9 : 30 ヤーノシュ・ゴンダ公開講座
János GONDA (ハンガリー)
作品の統一、ハンガリーピアノ教育における即興演奏と解釈・作品の調和について
- 10 : 30 ハイルデ・クラム＝ワルター公開講座
Hilde KRAMM=WALTER (ドイツ)
S・パースタインによる“あなた自身の2つの手で”その生涯と著書の研究
- 12 : 00 ラウンド・テーブル ディスカッション
～ハンガリー大会を終えて～
パネラー：榎田靖子、斉藤政子、ビビヒト＝アクセンフェルト、クラム＝ワルター、カリン・マルツナー(オーストリア)
エルジュベート・トゥーシャ
- 13 : 30 以上で大会はすべて終了した。

- 16 : 00 バルトーク博物館見学
- 19 : 30 国立オペラ劇場の歌手によるボーカルコンサート

3 / 18(月)

- 9 : 30 国立リスト・アカデミー学内見学
 - 12 : 00 リスト博物館見学
- 昼食後
- 15 : 00 ブダペスト市内観光

けました。

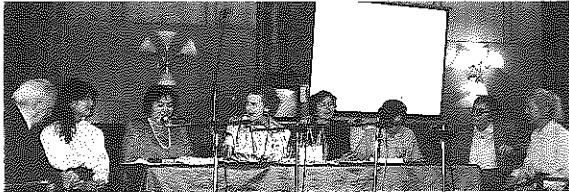
くさり橋を渡り、国会議事堂を見ながらマーチャーシュ教会へ向かいました。教会は、荘厳にそびえ立っていて、中に入っていくと、その神聖な張りつめた空気の中で、身の引き締まる思いでした。そして、高く高く続く天井を見上げていると、なんだか涙もなく感動してしまっ、胸がつかまってしまいました。1歩中に足を踏み入れるとそこには、もう俗世間とは全く違うもう一つの世界があったのです。教会を出て、漁夫の岩をのぼると、そこから、ベストの街が見下ろせ、又、目の前にドナウ川が流れていました。ベストの街の眺めは、その歴史や文化など、言葉で言い表せないほどのものを私に語りかけ、また与えてくれましたし、果てしなく続き、休みなく流れているドナウ川を見ていたら、何もかもが洗い流されていくようで、『自

(次頁の下へ→)

大会の最後は、日本・ハンガリー・オーストリア・ドイツの代表により、母国のピアノ教育の現状をそれぞれ披露し、今後の研究や教育の方向を探るパネルディスカッションで幕を閉じた。

トゥーシャ先生が、ブダペストのような都会の子供たちに比して田舎から来た子供たちの演奏が胸を打ち、また、子供の時は、音楽的にすばらしい演奏をするのに、大学生以上になると、無理な打鍵があったりして、どうも成長が止ってしまうようだ、と話されたのは、日本で感じていたことがこのハンガリーでも言えるのかと、音楽教育の問題点に共通点があることを感じたのだった。

それにしても、リストを生み、コダイが種をまいたハンガリー音楽教育のすばらしさに深い感動と、学びつくせぬ何かを感じて、EPTA大会を辞したのだった。



上写真：大会最後を飾るパネルディスカッション

右写真：リストアカデミー見学の折ナードル先生がモーツァルトを弾いたゾルダ君の個人レッスンを見せて下さいました。

右下写真：ランドシュ先生が、私たちだけの為にパイプオルガンで即興演奏をして下さる

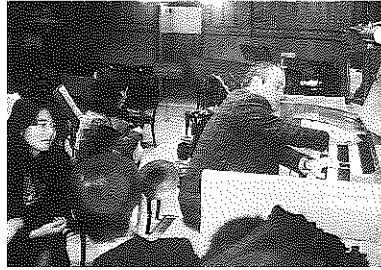
下写真：バルトーク博物館の前庭で



(前頁より)

分がどんなにちっぽけでしかないか」をひしひしと感じ、ある意味で、今までの小さいことへのこだわりなどをふりきることができました。

こうして、私の6日間は、本当に『あっ』という間に過ぎていってしまいあと1週間、いや、あと3日でもいいから長くないいな…と名残惜しい気持ちを残しつつ、ハンガリーをあとに帰路についたのでした。



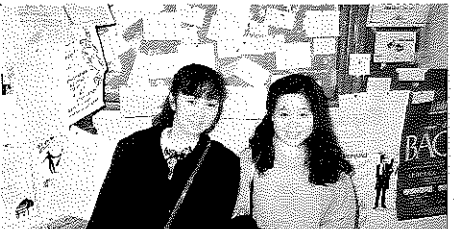
あんなに短い間ではありましたが、たくさん私を学ばせてくれました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。福田先生をはじめ、斎藤さん、添乗員の寺田さん、今出さんのお母様・お祖母様、石本先生、本当にお世話になり、有り難うございました。また、こんな素敵な旅をさせてくれた両親に、心からお礼を言いたいと思います。



上写真：ウィーンシェーン・ブルン宮の中庭で旅も終りに近づきました
右写真：ウィーンアカデミーで教えておられる今井頭先生を訪ねて
ビティナ出身で東京芸大からウィーンアカデミーに留学中の三宅由利子さんも一緒に



右写真：ウィーンのペートル・ベンのお墓の前で。左から今出黎子、原まり子、近藤麻里の皆さんと私福田靖子。ハンガリーでの演奏が終えてリラックスタイムです。



上写真：リスト音楽院の玄関にある伝言板の前に立つまりさん2人。先輩で同学院に留学中の友人にインフォメーションを送るために、この伝言板にピンナップした。その後無事連絡がとれた。